

「フィンランドに渡り 30 年、その活動体験と生活での気づき」

生まれも育ちも秋田、そして東京～フィンランドへ

高校卒業までは秋田市の実家におりました。大学は東京であったため、生まれて初めて秋田を離れることになりました。もともと短期滞在やめまぐるしい日程で訪問先が変わる様な観光旅行には全く関心がなく、海外に出かけるのであれば視察研究や仕事というような現地の日常の歩みにも触れられ体験できる機会であれば…くらいに思っていました。

フィンランドへ

仕事で勤務地として初めてフィンランドの日本国大使館、ヘルシンキに赴任したのは 1990 年秋から 2 年半でした。この 10 月でフィンランドで取り組む仕事との 30 年余りの関わりとなります。この間結婚に伴って改めてフィンランドに入国し、日本商社で 9 年間、フィンランド国営通信会社本社に日本プロジェクト担当で 2 年間おりました。途中は 3 年間の育児休暇もあり、また 2000 年代初めには離婚も経験しました。2010 年からは独立しそれ以来一人企業を続けております。 - これらすべての中で与えられていた歩みは職場環境や家族環境が変わるたびにいつも目を開かれる経験となりました。これら全てによってフィンランド共和国での社会福祉制度もより具体的に体験し理解することができ感謝しております。

1990 年からこれまでのフィンランドでの生活と仕事は、この国やここで生活をする人々のことをありのままに体験させてくれました。それは日本の TV 局による取材番組などで先に決まった日本人好みのストーリーテーマで紹介されるものとはまた一味違う現地のありのままの営みです。日本からはこれまでよく視察調査団として自治体も含む公共機関、学術研究機関、そして民間企業からもよくいらっやっています。

フィンランドについて日本から特に関心を持たれている分野、また当方もプロジェクト、通訳、翻訳、コーディネート等に関わってきたものとしては次のものが例としてあげられます。：

1) 福祉サービス

・「社会保障セキュリティ番号」これは日本のマイナンバーにも似ているが、その歴史は古く 1960 年代から既に一般市民に利用されるようになり、親しまれている。国民背番号として負のイメージにさせる日本での意識のような自分の安全を脅かすものではなく、名称の通り個人のアイデンティティを確実にし、他者になりすませられないようにするものである。居住地の自治体が変わっても、この番

号によって手続きは簡略で、同様に税務署での毎年の税金個人申告、法人申告、その他サービス利用・修正・追加もインターネットのホームページから電子的に簡単に手続きが可能である。医療データも本人は個人診療情報を見ることができ、他者による閲覧・使用に関しては項目ごとに制限が可能である。何かの際の治療方法、臓器移植に関しても希望を明記できる。

今回コロナ禍でフィンランドの「コロナ・パスポート」として作成されたものは「EUにおけるCOVID-19 証明書」に従った内容であり、KELA(フィンランド国民年金社会保険機関事務所)が管理する「Kanta Service」カンタ・サービスでのWeb ページ内に「My Kanta Page」本人ページから入手可能である(PDF 印刷版かモバイル用 アプリでQR コード付き)。

- ・出産・育児関係の保健センターサービス～「ネウヴォラ(Neuvo)」システム、これは子供が生まれる前、お母さんのお腹にいる時から小学校入学前までその子供のみならず母親、父親(またはパートナー、保護者)全体の健康と気力・体力を個別にサポートしてくれる。

- ・母親に与えられる「マタニティー・パッケージ(Äitiyspakkaus)」

- ・高齢者福祉～「高齢者サービスセンター」(のちに総合的な「多機能サービスセンター」に含まれるものとなった)

- ・育児休暇～同じ職場、担当業務での職場復帰の権利として最長で3年間まで育児休暇が可能です。

私の場合も3年間とりましたが、3歳まで一緒にいると、職場復帰前の保育所に慣れるための練習訪問からすでにそこでの遊びに夢中になって親のことなど忘れていました。よって会社に行くのは気持ちとして簡単に移行できました。

- ・保育所～私の場合は「家族デイケア」という形式タイプのところで、市から認可された保育士が自宅で子供を4人前後預かってくれるところでした。アレルギーのない子でしたので、そのお家には大きな犬が2匹いたり、また休暇中の代理のところには大きな猫がいたりとペットのいるところで子供はいつも大喜びでした。フィンランドのシステムでは保育所で朝食も出してくれますので、朝は子供を起こし、顔を洗って服を着さえすれば送っていける状態です。子供もゆったりとして朝食をいただけるので感謝なことでした。朝7時に自宅から数百m先にあるその家まで子供と歩いて送り(冬はそりに乗せて連れて行く親も)、夕方5時に迎えでした。出勤・退社時間の調整で母親・父親で互いにどちらかを受け持ちました。

これ以外のタイプでは幼稚園式の人数の多目の保育所施設もあります。私の場合担当の保育士さんはベテランで自分でも成人した2人の子を育て上げた素晴らしい方に恵まれました。毎朝送って行くと保育士さんは笑顔いっぱいでお親の方を送り出してくれたので、親もその日の仕事を毎日気持ちよくスタートすることができました。

2) 教育制度

- ・学校での学び方～PISA 試験(国際学習到達度調査)の結果が目立っていた頃あたりから日本からの視察者が多くなった。

- ・給食は小中高、職業専門学校では無料。大学では廉価だが有料。

- ・授業料は大学まで全て無償(EU 外からの留学生は最近から有料に改正された。それまでは誰でも無償であり、タダで学び自国に帰る学生も国によってはよくいた)。

- ・教科書は大学では各自調達(高校、職業専門学校では2021年入学者から教科書、教材は無料に法改正された)。

- ・フィンランド国家教育委員会による教育指導要領の基本、土台は「信頼と責任」である。そのカリキュラムは何月何日に全国揃って教科書のどの箇所を指導終了していなければいけない、というもの

ではなく、極端を言えば、教科書を使わなくても教師の教材によってでも可能で、教科書を進める順序は前後しても問題ないというもの。幼稚園教諭から、小中高校教諭も皆大学の教育学部で修士課程以上を修了している。また教育実習期間も長く、回数も多く、授業実習後すぐ反省会、フィードバックと実際面で経験を積ませる。

- ・学校は「学び方、調査解明の方法」を学ぶ場、暗記力は学力の評価には入らない。資料を調べ確認するための検索方、たどり着く調査判断力を身につけさせる。

- ・生徒には基本姿勢として物事を「批判的(to think critically)に考え力」を育てる。言われた内容で維持するだけでなく、疑問を持ち、何かさらに改善できないかと変える点を考えられる者に育てていく。

- ・中学1、2、3年時に「職場体験実習」をする単位がある。実習先を生徒本人が探し、メールや電話問い合わせをするのも練習目的の一つ。

- ・小学校からPPT(パワーポイント)などでのプレゼンテーションと質疑応答を体験させる。

- ・宿題が少ない、夏休みの宿題がほぼない(タイミングが学年度末明けではあるが)夏休み2ヶ月半で過ごしたことは、秋に学校に戻った時に授業でまとめや発表をさせる。

- ・プログラミング教育を教育指導要領に導入実施開始2016年新年度から。

- ・義務教育後の進路で高校と職業系専門学校(実習時間が多く実践的)と本人の学び方に合った学びの進路が選べる。

- ・職業系ポリテクニック大学制度もある。

- ・フィンランド独自の大学入学資格試験制度。

- ・卒業論文、卒業制作は企業などの実際の職場から与えられたプロジェクト業務で実践できる機会が多い。[官民学で協力して機能しやすい受け入れ態勢~皆、これを利用してきた人たちが職場側に]

- ・ヘルシンキ大学とReaktorという企業の協力で一般に公開された無料のAI講習コースがオンラインであり。

3) ハイテク技術、科学技術開発面

- ・モバイル通信分野~NOKIAが有名になった頃から

- ・スタートアップ企業大型マッチングイベント「スラッシュ(SLUSH)」~ヘルシンキが発祥の地

- ・モバイルゲーム開発

- ・プログラミング者の育成

(小学校から、そして私立学校で若者向けの専門学校、Hive Helsinkiが開校され2019年から第1期生スタート)

- ・クリーンテック(Clean Tech)

紙パルプ分野の企業がBio燃料の開発も進めている。様々な日常素材のリサイクルの関しても分別は市民の習慣として定着している。カーボンニュートラルを目指す新規の対応方法も増やしている。建物の外壁素材、空調システムの開発等。ヘルシンキ市の「環境センター」ビルはオフィス自体が実践展示場にもなっている。

- ・宇宙技術(Space Technology)、開発は欧州宇宙機関(ESA)での取り組みであるが、フィンランドが開発した技術部品もMars Expressに使用されている。

4) ライフスタイル

・サウナ ～ 日本のように時計で測ったり、サウナ内臓TVを見たりはしません。こちらで「サウナに行く」という場合はシャワーで洗ってサウナに入り、またシャワーで冷まし(湖の畔りのサウナ小屋では直接湖で泳ぐことも)サウナへの繰り返しと、最終的に出てリラックスしたところでゆっくりと冷たい飲み物や美味しい軽食をいただく歓談のところまですべてのことを示します。ですから、サウナには30分という感覚はほとんどなく、全体で最低1時間半以上はかけるくつろぎ・おもてなしタイムです。

昔の大統領は、フィンランドに外国の元首が来た時にも空港からまっすぐ大統領官邸の海辺のサウナ小屋に連れて行って、裸の付き合いで話し合う～というお話を聞いたことがあります。嘘はつきにくかったかもしれません。

・サマーコテージ～古着、古い生活用品もよく使う環境。ハイテクとこの古い物もいつまでも大切に使うというその場所による頭の切り替えができる国民性は不思議さもあります。フィンランド人は夏休みにコテージに行っても、年配の方は特にいつも何かしら作業をしてしまうようです。木工作业や修理をしたり、ペンキの塗り直しや庭の手入れをしたりと。

・工業デザイン製品やアートデザイン、ファッションデザイン

いずれもシンプルで美しいデザインであることが多いかもしれません。フィンランドらしさが出るのは、そこにしっかりと実用性があることです。誰にでも使い勝手が良く(Design for Allの意識)、機能的で、すっきりとして美しいものです。食器などでは色、形、サイズを多様にして組み合わせによりバリエーションを増やし、より自分らしさを出して利用できるものも多く見られます。

フィンランドの自然。 - 森の緑、森のベリーの色、湖、夏の青い空、冬の雪や氷った海- からインスピレーションを得てデザインされたものが多く生み出されています。

例えば、この10月1日(金)～3日(日)、フィンランドの首都ヘルシンキ市東部海岸沿いにあるHotel Rantapuistoを会場にして「Superwood Festival」が開催されていましたが、これらフィンランドの自然がよく表現されておりました※。音楽・アート・パフォーマンス中心のイベントで、全体のキュレーターはIvana Helsinkiのデザイナーとしても知られている著名なパオラ・スホネン(Paola Suhonen)さんでした。これまで私は彼女の日本関連のプロジェクトで彼女とご一緒していました。彼女はファッションデザイン、映画製作、シンガーソングライター、そしてヘルシンキの新設子供病院で使用される子供の病衣のデザインやヘルシンキ中心部にあるホテル・プレジデンティ大改築の際に内装全体での新規コンセプトデザインを担当しました。これはまさにフィンランド教育の元でのびのびと育ったパオラさんの一分野に留められない多様な能力が生かされたプロジェクトであったと思います。

※このイベント会場で私も、フィンランドでの30年間をじっくりと振り返っていました。その時の景色を次ページにいくつかの写真でご紹介しておきます。

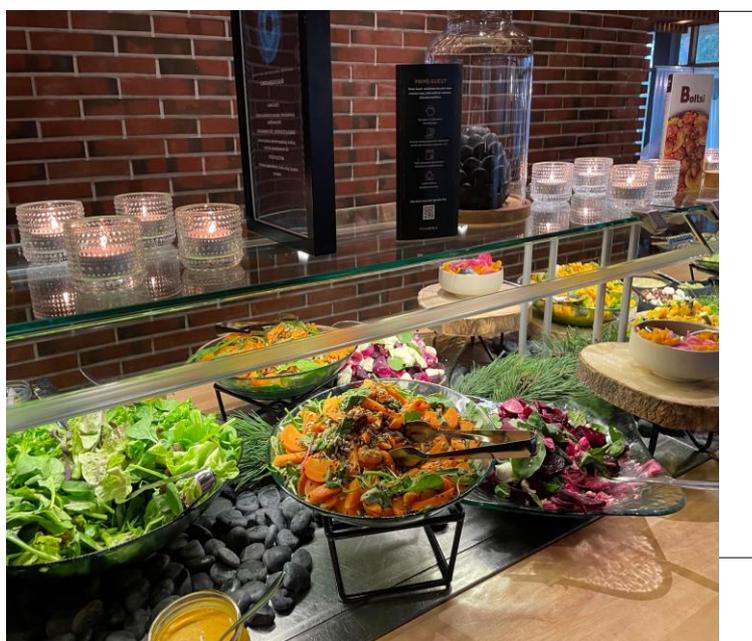
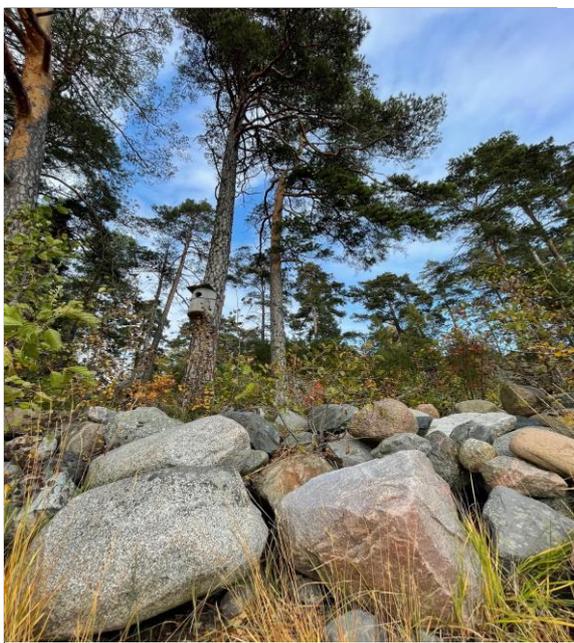
以上はフィンランドについてのごくごく一部のご紹介に過ぎません。今回ここでは関係分野について項目でのご紹介のみとさせていただきます。

...

先に全般的な特徴のご紹介をしましたが、次に当方がこれまで学び認識した点についてご紹介したいと思います。

フィンランドでの取り組み

いつも人と人とのコミュニケーションに大変関心があり、いろいろな言語についてもその言語文化を持つ人たちの背景や考え方が根本から理解できればできる程、その言葉を介しての相手への理解や意思伝達がよりスムーズにできるであろうと思っていました。それは日本語、外国語だけでなく例えば手話や点字、シンボル化された絵などによるものも含めた、あらゆる媒体に関してです。



社会人になってからこれまで、この人と人とのコミュニケーション、そして話し手が本来意図していたことが相手に伝わると分かるまでのところが本当の意思伝達であると信じ、こちらフィンランドから取り組み続けております。

今はメールやモバイル装置によるメッセージ媒体で手紙も、関係資料の送付も添付して電子的に送られている時代です。それでも日本でのコミュニケーションでよく聞くフレーズは「××の資料を添付ファイルをご覧ください。」、「○月×日に確かにメールの添付ファイルでお送り致しました。」などです。ここで送信者側から重要視されるのは○月×日に送ったという事実です。その証拠の記録とでもしているのでしょうか。ただ、これでは受信者がそのメッセージや添付ファイルの資料について読んでいるのか、開封して読まれたにしても、送信者の意図はその通りに理解されているのかまではわかりません。義務や責任を果たすという場合、この段階で発信者は果たしたと認識されている場合も多いと思われます。

この点で、西欧の各国と日本には違いがあることに気づかされています。日本は島国ですから自分たちの島、国の中であるべく平穏で良い調和が保たれることに人々は気を遣います。職場や外部とも関わる会議でも、できる限り自分は波風を立てる役にはなりたくないと思うでしょう。それに対し欧州では各国が陸続きになっています。その中で人の動き、商業も文化も昔から行われ続けています。- コロナ禍になってこそオンライン会議も授業も増えていましたが、それまでは直接の対面による会議や話し合いの場が一番信頼される方法であると認識されていたはずで

地理的に外国と互いに陸続きである欧州諸国間では、話し合い・交渉をする際は自分たちの意図することがきちんと相手方に理解された上で伝わるところまでに気を払います。「～をお伝えしてあります。」では不十分なものです。取り決めにしてもその場で確認をします。相手にどう理解されているかを確認できるまで何度でも問いますし、受信者側も本当にすっきりと分かるまでは発信者側に確認をします。この「不明点や疑問点を問うこと」や「何度も確認すること」は決してネガティブなこととしては認識されていません。後日別メールや電話で「やはりそこは違いました、そういう意味ではありませんでした」と伝え直し最終決定前に再交渉を求める状況よりも、何倍も大切に当然あるべき対応であると西欧では理解されます。質問・確認自体はニュートラルであり、問い合わせた本人の能力や人格には何の影響も及ぼさない類のものです。日本ではこのあたり本人の能力や人格の足らなさ、つまり自己への評価に結び付けられてしまうと心配してしまうのではないのでしょうか。

...

2000年のフィンランド国営通信会社時代からその後独立し一人企業である現在まで、日本に駐在勤務になる企業・省庁等の各分野のフィンランド人エキスパートたちに日本語と日本での職場習慣についてのトレーニング講習も受け持っております。この中でフィンランド語と日本語、また英語等と日本語の間での言葉の違いから様々な考え方の違いの背景まで気づかされてきました。

日本語では「私」や「あなた」という第一人称・二人称は特別に強調したい場合以外は大抵表現されません。企業紹介のページやプレゼンテーションでも、フィンランド語や欧文の場合は段落ごとに自社の名前が真っ先に表示されることがよく見受けられます。こういった案内やマーケティング文書を日本語に翻訳するときは、もちろん「弊社」に変えたり、もしくは2度目以上はそれなるべく使わない様にしたりと気をつける必要も出てきます。

また日本語では話し手の意図の中心である動詞が文末に来て、口頭の話合いの場合では文末がややふやで声が小さくなることもあります。この点が欧米の方にはなかなか理解しにくい、身につけに

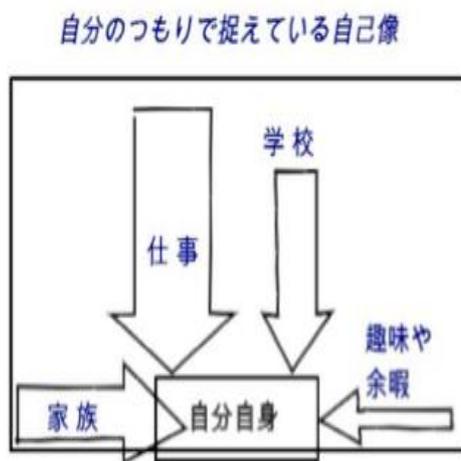
くい文法的特色の様です。学び手から口頭で良い文がほぼ仕上がりにつつある…と思う場合も文末の「です。/ではありません。」が欠けがちです。欧米の方は文の最初に強く明確に動詞で意思表示をする形になっています。日本語では会議の場でも発表者は聞き手側の表情や反応を見ながら、ネガティブな言い方をしない方が良いと判断すれば、文末のところで肯定文・否定文に変更可能なわけです。

...

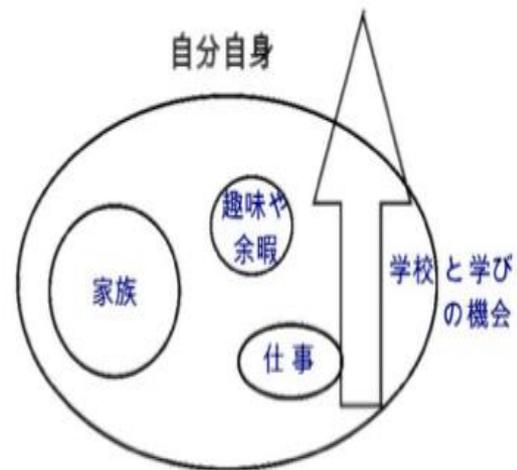
日本人とフィンランド人との自分の役割としての自己像の捉え方の違い

日本人として (図1 参照)

日本で生まれ、家庭でそして学校教育の中で育てられていく間、日本人は周囲が自分に何を期待しているかによって行動を決定する環境が強いと思われます。家庭では「親は自分がどうすべきと期待するのか、どうすれば親が喜んでくれるのか」、学校では「担任や各科目の先生は自分がどう答えると評価してくれるのか」、「クラスみんなは、自分がどうすると受け入れてくれるのだろうか」という様な影響があり、誰も言っていないのに本人自身の言葉や態度に自発的な制限や調整が働いてしまいます。



(図1) 日本人の自分像に影響力のあるもの



(図2) 筆者の認識によるフィンランド人の自分像

自分が所属する組織に合わせその組織長からよく評価されるよう、もしくは喜ばれたいと自身の行動を制御していきます。見るところは組織の大枠、外から自分により近い核心部分へと向かいます。親を喜ばせたい、クラスの友達に悪く思われたくない、上司に気に入られたい…ということが行動決

定の中心になり続けると、いつのまにか「自分自身」がやりたいこと、希望も外から囲む他者の希望となっているかもしれません。「あなたの意見は何ですか?」、「何か反対意見はありますか?」と言われた時に日本の生徒たちは答えにくいことも多いようです。どう答えて良いのか、何を答えて良いのか上から許可を得ている模範解答以外を聞かれると困惑してしまうこともあるようです。

フィンランド人の物の見方 (図2参照)

(あくまでも筆者の個人的な印象・認識より)

フィンランドでの生活や職場にも慣れた頃、人々への印象は「みんな好きなようにバラバラに動いてる、発言している。」というものでした。勤務当時まだフィンランドの国営通信会社であったところで(現在は民間企業で本社はスウェーデン)日本プロジェクトで入った部署はモバイル関係の研究開発部でした。自分のデスクと他の同僚とは仕切りがありました。上司や秘書は個室でしたが。ニューカマーでしたが、特にオリエンテーション的なものはなく、各同僚との挨拶程度でした。誰も手取り足取りでガイダンスを与えてくれるわけではありませんでした。最初はそれが何かちょっと冷たいような、置き去りにされたような気持ちになったのですが、ここにフィンランド風の秘密が一つ隠されていました。

フィンランドの人は決して相手に無断で入り込んでくるようなことはしません。必ず本人から「～を教えてください」、「ちょっと助けてください」という様な要望表示があって初めて皆助けの手を差し伸べてくれるのです。問い合わせしたり、聞いた時には、自分の仕事何か途中であってもすぐに笑顔いっぱい助けてくれました。勤務時間がフレキシブル制でもありましたし、皆自分のスケジュールで毎日を組み立てていて、人の出入りも見本通りにバラバラでした。自分も自由にできるし、他者の自由ももちろん認めていて、勝手な口出しはしないという姿勢です。

これは直属上司との話し合いからも見受けられました。担当のプロジェクト業務を進める際に、上司から「これについては〇月×日までに完成させてくれ。」ということで、実はこの場合課題の完成については、そこにたどり着くまでのやり方、プロセス全て自由でした。約束の日時まで要求内容を完成させていれば、全く自分流に進めても良いのです。これは、他の同僚についても同様です。皆、自分らしい日程を組み立てて目標達成、完成まで仕上げていきます。先ほどのフレキシブル制ではありませんが、この上司に私は最初毎日出勤時と退社時に部屋に挨拶に行っていました。すると2、3日して上司が「あなたがいつ来て、帰るかなど全く関心がないので、いちいち報告に来なくてもいいですよ!」と。この上司はそれ以前、日本駐在員としてフィンランドの科学技術研究機関にいた方で、日本人のこともよくご存知で、あの言葉も苦笑いしながら言っていました。

仕事の達成課題と締め切りが与えられ、行き方自由やり方自由として与えられると、本当にやりがいがあります。その代わり、日本でよくある様に細かく分けられたプロセスごとに上司に報告する様な細切れの作業ではありませんので、全体として自分で戦略を組み立てなければなりません。受け身の容易さはありませんが、責任とともにモチベーションも高まりました。

この部署のフロア中央にあった休憩スペースは、大きなテーブルがありお弁当を食べたり、コーヒブレイクをするところで大画面モニターもあり、常に世界のニュースを流していました。いつも

色々と違う専門家の人達とニュースについてやその他雑談など何でも話せる空間でした。上司もこのスペースについては「このフロアで一番良いアイデアが生まれるのはどこかわかるかい？あの休息室だよ！」ちなみに、フィンランドは国の法律、労働基準法の中に勤務時間中の「コーヒープレイク」について条項で取らせなければならないと規定している国です。

さて、(図2)で表しているのは、フィンランドの人が自分自身として捉える時は本当に純粋に自分の取り組みたいことが中心となります。家族と過ごすこと、家庭のこと、仕事・キャリアのこと、職場のこと、趣味のスポーツや芸術、手の技など人によってその重要度、優先順位も組み合わせもバラバラです。学ぶことについては、学校で学ぶことという時、義務教育がまずあり高校・職業専門学校、さらに上にポリテクニク、大学での学びがあります。これらは学生という時だけのことでなく、生涯学び続けることができます。企業によっては職員スタッフに、外部教育機関でのコースで学ばせる機会を与えるところもあります(パターンは様々ですが、例えば時間は勤務時間に認める、もしくは短期の講習でセミナー費用も出すなど)。また、フィンランドでよく見受けるのは1年間の休職が認められ、例えば米国その他の大学に1年留学し、その後職場に復帰できるという様な人事システムです。

これ以外でも、例えば時の状況、需要の多い職種の変化などの状況に伴い、別の専門職の技能を身につけるために職業系の専門学校に成人教育課程のコースで学ぶ人も多いです。フィンランドでは文字通り生涯学ぶことができ、キャリアアップ、キャリアの拡大をしていける環境と人々の認識になっています。そのため(図2)では、学ぶことについては仕事と関わって、また個人的に学べるということと、社会人になってからの学びによってそれまでの自分自身をさらに超えて、より成長した自分として歩みも選択できる環境であることを表しています。

...

2000年代も20年を過ぎ、モバイル、AI、IoTと発達変化している毎日です。昨年フィンランド国営放送局のラジオ番組であったテーマで、これからの職業に関するものがありました。これから生まれてくる子供達～今小学生の子供達、この子たちが大人になる頃には伝統的にあった職業で消えていくものもあるだろうし、新たに全く新種の職業も出てくるであろうということでした。「将来、何になりたいですか？」と聞かれても答えるのはだんだんと難しくなるかもしれません。まだない新サービスもどんどん出てくるでしょう。いずれにしろAIを駆使した作業はアルゴリズムによる処理で、個人で考えたり、気持ちが入っていたり、気持ちの判断があるものではありません。大量のデータから数秒で分析処理する点では人はとてもかないません。そういったことはますますAIを利用したサービスで対応されていくでしょう。私たち人間の方は、相手への理解、相手にわかりやすい説明、教授、話し合い、(コロナ禍の制限された状況が収束されて、人と人との接し方環境が戻ってくれば)人と接し対応する働き…という様により独自の専門性を深めた仕事、状況を判断し対応するきめ細かな仕事、芸術面でもこれまで以上に人間の力がより強く発揮される内容になってくるのではないかと思います。

人口が550万人あまり(2020年現在)ともともと少ない国で、多様なサービスを提供するには利用者側のセルフサービスも含めながら[基本サービス内容+本人の選択サービス内容]によって個別対応に近づける様にしていました。

2010年代を過ぎた頃からこちらフィンランドでは、福祉分野を見てもこれまで「高齢者サービスセンター」と言われていた市立の高齢者居住施設とデイアクティビティ・センター機能があったところが再編成されました。新しい形はコミュニティーの中での多様な、多機能サービスセンター施設としてです。ここには高齢者関連の機能はもとより、子供・家族向けの Neuvola、保育園、小学校、図書館、保健センター(病院・医療機能)、ショッピングセンター等が含まれているコンプレックス施設です。その施設建物としても多様ではありますが、関係スタッフも違った分野の専門家たちを集めた専門家委員会グループを持ち、従来の「1分野の専門家その担当分野のみで対応」というやり方を取り払って、互いの専門性から知恵と経験を出し合って、住民によりしっくりくる様なサービス提供と対応ができる様努めています。

日本で盛んに取り上げられている「サステナビリティ」、またアルファベット表現での「SDGs」国連による持続可能な開発目標(17種)や「DX」(デジタルトランスフォーメーション)等についてですが、前の部分でなぜ取り上げられていなかったのだろうと疑問に思われている方もいらっしゃると思います。その理由は、他の北欧諸国と同様にもこちらフィンランドでも実際に日常や産業の中で意識レベルも親しまれ浸透している部分も多いという背景があります。ある意味満たしていくべき当然の条件となっている部分が多くありますため、これらの言葉を特別にあげることで体が不自然で、宣伝文句のように取り上げると「それについてはまだ実践されていないのか。」と逆に見られてしまうこととなります。そのためこちらの企業その他機関等でも特にわざわざ明記しない、それが特別なことではないという段階にあると思われれます。

「DX」についてもこちらでは現地語からかけ離れたわかりにくい言葉ではなく「デジタル化」という表現で2000年代始めでもその意識での取り組みが進められており、前に述べました1960年代から採用された社会保障番号システムもその好例であり、まず初めに国民・住民から信頼される国のシステムとの関係という基盤があったということの影響も利用者側の安心感や実施普及のしやすさに影響を及ぼしているでしょう。事例は日常生活と職場環境、サービス、ビジネスチャンスがある数だけ、今日特に言葉として意識されなくても数多く存在しています。

フィンランドをぜひ体験して下さい。眠っていた五感の感覚が生き生きと目覚めるはずです。取り巻く森や湖の自然、人、ライフスタイルに違和感なく親しみやすいことでしょう。

補足

(1) フィンランドでデジタル化が非常に進んでいる理由

日本ではこの10月にやっとデジタル化の旗振り役のデジタル庁が発足しました。

日本でデジタル化が遅れている理由の一つは、国民が政府に個人データを吸い上げられて、本来の使い方とは別の使われ方がするのではないかという懸念があるからだと思います。

これに対して、フィンランドは随分早くからデジタル化を推進して成功していますが、その背景を少し知りたいです。例えば、国民の政府への信頼感、また政府が国民の信頼感を得るためにどんな約束をしていますか？

また、個人データには第三者が容易にアクセスできない仕組みとのことですが、これまで事故はなかったのですか？

フィンランドは世界で一番、汚職等には縁遠い国という評価がなされていますが、これは歴史的な国民性なのか、あるいは規則(国内法制)が正常に機能しているからなのか興味があります。

⇒

①フィンランド国民が政府を信頼している背景

いつでも、何についても全て信頼しているかどうかはわかりませんが、税金等についてはいつも嫌なものであることに変わりはないと思われませんが、大まかに見てということで述べますと、第二次世界大戦後、フィンランドはソ連に対し戦争賠償を物品にて納め、1952年に完済した唯一の国です。また1952年には戦後初の近代オリンピック、ヘルシンキ夏期オリンピックが開催されました。戦後の国の復興を進め、国民の社会保障、サービスにも具体的に力を注いで実現させていきました。

1960年代から始められた「英語名:The personal identity code(フィンランド語からの直訳: 社会保障認識番号)」によって、フィンランド国内の人々が様々なソーシャルサービス、教育から漏れずに提供が受けられるようにと仕組みを構築し実施してきました。これによって戦後貧しかった時代の後、社会的に置かれている環境、家庭の状況に関わらず生まれた時から始まる保健サービス(実際は母親のお腹の中から)、その後の教育機会も誰にでも与えられるようになりました。また、教育機会でもフィンランド全国のどの地域で居住し、通う学校においても教育指導要領や教師自身の資質(幼稚園教諭以上、全て教育学の修士以上の者)により支えられ地域差のない教育の提供を整え実施してきました。

1960年代に実現されていったこれら社会福祉制度・サービス、教育機会はその当時子供であった年代の人々は現在では60代前後、また当時幼い子を持つ親になり始めた人たちは現在70代前後かそれ以上です。つまり、そのスタート時を体験した人々は現在孫もいる年代になっており、3世代でこの社会福祉制度、教育制度の恩恵を受け、経験済みになっています。妊娠時から学童前の子育て時期を地域でサポートする市の保健センターによる「Neuvola(ネウヴォラ)」システムも、また義務教育で学費、給食費全て無償の教育システムも皆にとってお馴染みの仕組みです。こういった日常生活と子供達の将来の学びの可能性は育む環境も含んで支えられている実質面での体験がフィンランド国民からの信頼を得る土台になっていると思われま

す。また別の面では、大変好奇心が強い国民性も影響していると思われま

す。新しいシステムや道具・装置を試すことに抵抗があまりなく、どちらかというに進んで実証実験に加わるタイプです。「エンジニア気質の国民性」というように技術製品への信頼も厚いです。昔からドイツや日本をはじめ世界各国の自動車会社は冬季仕様の自動車開発の際によくラップランドで実験の場を得られたと言います。道具の実験についても、一般の人

② その為に、政府はどのような約束を国民にしてきたか？

フィンランドの場合「約束」を掲げて国民を引きつけようとするのは選挙前の各政党の選挙運動でよく伺えることですが、実際の国政で進めていく場合は、基本的に担当分野の専門家に対する信頼が厚いです。そういった政府の担当省庁もしくは政府関係機関が具体的に進めていく内容、その実質に対して信頼が置かれていくというプロセスであると思われま

す。国民性的にも派手に何かを明言し実質のない状態を嫌い、言葉少なでも準備・実施を実現した結果があ

って初めて信頼を置けるようになります。

まず最初のデータ取り使い例にもなるケースは、①の部分でも述べましたように、「The personal identity code(フィンランド語からの直訳: 社会保障認識番号)」の利用が開始され、国民が溢れることなく社会保障、ソーシャルサービス、教育機会を受けられるよう確立されている制度を親子3代までも体験できている現在がありますので、個人認証番号コードについてもネガティブなイメージの先行よりも、便利で安心さを増すという実質体験で支えられていると思われま

す。

法整備では「社会・保健データの二次利用に関する法律(政府提案 552/2019)」通称「二次法」施行に向けて準備期間があり、情報許可機関立ち上げのために2018年から暫定的な運営グループが設置

され、2019年に以下にある準備から施行までのレポート、そして2021年から使用開始となりました。このデータのプライバシーとセキュリティ、データ収集、保存、利用に関しての強化された法的基盤を作ることが最優先の事項であり、その上で初めて施行開始という流れでした。

「社会保険省による準備から施行までのレポート及び覚書」(2019年6月3日) この要約書からの引用で、「(仮訳) 二次法は、社会保障及びヘルスケアにて生成されたカスタマー・データ及びその他の関連した個人情報を、情報セキュリティ環境下で使用されるための均等な条件を作りもたらずのものである。情報許可の取り扱いにおいてより円滑な処理とカスタマーのプライバシーをより適切に保護することを目的としている。今後このカスタマー・データは研究、開発、イノベーション、管理指揮など法律で許可されている範囲内の用途で可能な限り柔軟かつ安全に使用できるようにされる。情報許可申請と様々に違ったソースからのデータ生成が明確化され、加速されるものである。」
このようにフィンランドでは社会的なデータのみではなく、公衆衛生に関するデータも体系的に収集し、現在では100%デジタル化された健康データ記録システム(Kanta システム、またその中の My Kanta Page)を保持しています。

また、これは政府だけの取り組みではないのですが、フィンランドでは何かを開発・新規実施を進めていく場合の取り組み方の特徴があります。そもそもの企画内容はあるのですが、現場で実際に人々に利用され始めてから後に不備・不便さが認知された場合当初の企画や予定に縛られずに、その不備を改善するよう対応します。こういった形で、より実際のニーズに合った仕組みを施行・利用の中でも必要に応じ改善していきます。技術製品等でも、よく言われるのはフィンランドでは7割くらいの完成度でもまず市場に出して、現場、利用者のフィードバックに合わせよりよく改善していくスタイルがよくあるというものです。理屈中心の技術者やというのではなく、実用中心の開発姿勢が伺えます。このようにして人々の利用の目的により合った、よりスムーズなアクセスや利用を実現させるアプローチ法が信頼感を増すことに役立っているかもしれません。

③ 個人データには第三者が容易にアクセスできない仕組みであるが、これまで事故はなかったのか？

フィンランドは世界で一番、汚職等には縁遠い国という評価がなされていますが、これは歴史的な国民性なのか、あるいは規則(国内法制)が正常に機能しているからなのか興味があります。

⇒

フィンランドの外側から見ますと、国の地理的環境として北欧諸国、またフィンランドもかなり遠く、寒いところでもあり華やかな歴史の中心地であった大陸ヨーロッパからはあまり政治的にも昔は注目されていない、目立たないところであり、そのせいか汚職なども起こりにくい実直な北欧の国民性が守られる環境であったのかもしれません。

個人データ取り扱いに関しては、二次利用の対象となるデータは匿名化された情報、集計統計データとして統計形式で確実に匿名化された情報が使用されるものです。病院で患者情報にアクセス権のある立場の職員が職務上得た情報に関しては、他の医療現場同様に医療従事者の守秘義務があるものでこの場合はデータの一次利用の際の事故になり得るものと思われます。詳細については「社会保険省による準備から施行までのレポート及び覚書」(2019年6月3日)にて情報許可機関、アクター、司法サービス等からより詳細に対応が決められている全体像が示されています。

(2) フィンランド人の自己像の捉え方やモノの見方

フィンランドの歴史を見ると、長い間お隣のスウェーデン王国に属していたり、完全独立は1917年で、第2次世界大戦の初期には日独伊の枢軸国側についていたり、結構な波乱万丈を経験していますし、大戦後は旧ソ連と国境を接していることで、ソ連にも気を使い、西側とも仲良くするという綱

渡り外交をしてきています。ひと頃は、ソ連への気の使い方を「フィンランド化」というあまりありがたくない名前で表されていました。

今の60歳以上の人達は、ソ連からの圧力を感じて、かつ西側とも仲良くするというバランス感覚の環境で過ごしてきた経験があると思います。

そのように考えると、文中にある「みんな好きなようにバラバラに動いている。発言している」という印象ではなく、少なくとも年配の人達は、自分の置かれている環境を良く考えて行動していたのではと誤ってしまいます。もしかしたら、冷戦を経験したことの無い若い世代はその様ではないのかもしれませんが、その辺のことも聞いてみたいです。

レポートの感想と言うよりも、フィンランドに対する私の興味です。

⇒

長い国境線のあるお隣の国については、一般国民よりも政府側で強く気にしていたものであると思われれます。戦後、中央党のケッコネン大統領の時代(1956~82年)はお隣との関わりをよく保って政策を進めていました。冷戦時代はフィンランドは西側と東側の橋渡し役として1975年にはCSCE(欧州安全保障協力会議)がヘルシンキのフィンランディアホールにて開催され、「ヘルシンキ合意」の文書が採択されました。保守系である中央棟ケッコネン大統領の後(1982~2012年)は社会民主党の大統領が続きました。2000~2012年はフィンランド初の女性大統領、ハロネン大統領。現在は保守系の国民連合党出身のニーニスト大統領です。1995年1月1日からフィンランドはEU加盟をしました。それ以後はフィンランドもEUの一メンバー国として、お隣のロシアとの政治的交渉は前ほど直接中心的にはしなくなり、EU経由で進めることが多くなりました。それでもEUとロシアとの関係が改善化されにくい現状で、特に現在の大統領は時折お隣の大統領と直接話をしたり、伝えにくい問題点の指摘も直接で伝えて対話できる環境は維持しバランスを取っているようです。

それに対し国民ひとりびとりでの立場では、基本的に自分のペースで歩む姿勢は昔からあったものだと思います。お通りのんびり目に過ごすことのできた他の北欧諸国と違い、フィンランドのみお隣との国境が長くありましたので、他国から守ってもらうことは期待しないように、もっと自立し自分のことは自分で守るという精神が強いのではと思われています。それに関係するかはわかりませんが、フィンランド人は自分の家の周りが木々で囲まれているか森の中に一軒家に住むことを昔から好んでいます。サマーコテージでもなるべく隣が目に入らないような場所を好んでいます。(フィンランドは首都のヘルシンキ市中心部であっても森がそこら中にあり、街の中心部でも住居は木々で囲まれているようなところにあることが多いです。)

こちらでの当方の職場体験でもありましたように、やはり相手の要望、意思表示がない限りは勝手に他人の領域には入りませんし、自分にもそれを望みません。そういう意味では、個人個人、お互いに自分のやり方、ペースを尊重するという考え方であると思われれます。

その他、フィンランドの背景情報について：

女性の社会進出

・フィンランドでの完全女性参政権 (国会議員選挙への立候補、及び投票権)が1906年、今から115年前に始まりました。他の北欧諸国よりも早いものでした。(当時はまだ「ロシア帝国領フィンランド大公国」(1809年から)時代。スウェーデンの一部であった時代の後、ロシアの下となったが、スウェーデン時代のままでスウェーデン語・フィンランド語という使用言語、宗教、スウェーデン式の法制度についても制限なくフィンランドとして自由な自治権を与えられていた。それに敬意を払いヘルシンキの大聖堂、首相府、ヘルシンキ大学本部に面する広場中央には当時のアレクサンダー2世の像が現在もある。通りの名も彼にちなんで「アレクサンダー通り」)。

意識面にも影響を与えると思われる言語ですが、フィンランド語での三人称単数の表現は人については1種類のみ、男女の区別無しです。英語では'he'や'she'、と他のインド・ヨーロッパ語族の言語でも大抵「彼」、「彼女」と男性、女性で分けられていますが、フィンランド語では'hän'

(ハン)のみで人を表します。物や動物については文法上は' se' (セ)で区別はあります。つまり、フィンランド人の「人」についての認識になっていて、男女での区別が先ではありません。これも国民の意識の中で人の認識に影響してくる要素の一つとも思われます。

戦後、就業できる人員で男子の数が著しく減少した状況下で、家庭にいた女性たちは様々な職に就くように、また就かざるを得なくなっていました。実はこれがフィンランドでの女性の職場進出、職種に制限されない職場機会の要因の一つとなっていました。女性をもっと職場に進出させよう、割合・割り当て人数を満たそうというような理屈による受動的な理由ではありませんでした。そのせいか、こちらフィンランドでは路面電車、電車、バス、タクシーでも早い時期から女性の運転士がよく見られました。

フィンランドは北欧のお兄さんの存在と自認しているスウェーデン、そして他のノルウェー、デンマークの王国とは違い共和国です。アイスランドも共和国ですが。普通の人々が選挙で選ばれ、国会、そして法規制も整えていきます。王国のようにもともと上からの偉いお方のお言葉・命令で動くということには一般に反発があるようです。法規制にしろ、各政府機関の具体的な働きにしろ、基本的に事実を根拠とする調査データや科学的背景情報の基づいて判断・実施を進めて行くスタイルが国民からは受け入れやすい、信頼されやすいものとなっています。エンジニア、ハイテク科学技術への信頼も高いです

よくフィンランド人自身が自己表現としても「エンジニア国民」と描写していることがあります。ただ、そこには事実、事実データ分析への信頼度の高さだけでなく、別の意味で派手な飾りや「華」、王国のような華やかさがなく言葉少なにただ淡々と業務を遂行する者としてのイメージも含まれています。

無駄におしゃべりをせず、黙々と仕事をまず完成させるというのが昔からあった人間像であると思われれます。そのせいか、現在でもフィンランド人はレセプションやパーティーでのスモールトークが苦手です。

(3) コロナパスに関しての補足説明をしておきます。

⇒

一機関で作成・管理・実施される内容ではありませんため、背景をご理解いただければ幸甚です
.....

名称：KORONAPASSI (コロナパス、コロナパスポート)

= The EU COVID-19 certificate (EUにおけるCOVID-19 証明書)

<https://www.kanta.fi/en/covid-19-passport>

<https://www.kanta.fi/en/web/guest/covid-19-certificate>

・これはEUで認められる内容に従って作成されています。(以下3パターンのいずれか)

- a) コロナワクチンを2回目まで接種済み
- b) COVID-19テストの陰性証明
- c) 過去6ヶ月以内にCOVID-19感染し回復した証明

フィンランドでの証明書の作成もとはKELA (フィンランド国民年金社会保険機関事務所)が管理する「Kanta Service」(カンタ・サービス)としてまとめられている患者・カスタマー情報のデータ利用管理の組織、およびWebホームページによるサービスです。

全体としてのサービス内容の柱は：

1) 「Kanta Service」(カンタ・サービス)として患者・カスタマー情報のデータ利用管理関連Webホームページでのサービス。

⇒ 個人、自分の診療・処方箋情報は「Oma Kanta」(= My Kanta Page)

= マイ・カンタ・ページにあります。⇒この自分のページを開き、そこから

・自分のThe EU COVID-19 certificate (EUにおけるCOVID-19 証明書)を

PDFで印刷、またはスマートフォンでコピーを表示、
・もしくは2021年10月16日0時から使用開始された専用アプリにてスマートフォン
で表示可能となりました。

2) 統計データ

3) Kantaデータの二次利用のためのサービス

ということで、THL（フィンランド健康福祉院）自体のみが今回のコロナパスの発行者ではありません。このデータ作成・収集・管理、およびデータの二次利用許可のためには複数の機関が関わっており、協力のもと作成・管理されています。

STM: Ministry of Social Affairs and Health（フィンランド 社会保健省）

Kela: Social Insurance Institution of Finland（フィンランド国民年金社会保険機関事務所）

Valvira: National Supervisory Authority for Welfare and Health（社会健康業界向け許可・監督機関）

THL: Finnish Institute for Health and Welfare（フィンランド健康福祉院）

DVV: Digital and Population Data Services Agency（デジタル・人口データサービス局）

・補足ですが、「社会・保健データの二次利用に関する法律（政府提案 552/2019）」（通称：二次法）
関連内容の利用申請許可の一括対応機関として、新規に**FINDATA**という組織が編成されました。

<https://findata.fi/en/what-is-findata/>

目的は、それまで許可申請内容・取り扱い対象により上記の各機関別にそれぞれで申請していたものを、一括して許可申請先としてまとめるためでした。

以上